

審査の結果の要旨

氏名 佐川早季子

本論文は、幼児が造形表現を行う過程を他者やモノとの相互作用に着目し明らかにすることを目的としている。4歳児が幼稚園自由遊び場面において製作コーナーで廃材を用いて行う造形表現過程を観察記録し分析検討を行った研究である。論文は、全体で3部8章から構成されている。

第Ⅰ部第1章では、先行研究を概括し、モノや人との相互作用を通して造形表現を検討する枠組みとして、第一次人工物としての素材や道具からモチーフが生成され、第二次人工物としての製作物から製作目的が生じ、第三次人工物として製作物を使った遊び（想像上の意味世界）が生じるという人工物の高次化過程を、身体的位相、視覚的位相、言語的位相から捉える理論枠組みを、社会文化的アプローチの視座から導出している。第2章では、その方法論として、参与観察と微視発生的分析を論じている。

第Ⅱ部第3章では、4歳児1名の6か月間の製作過程の変化の分析から、他児との製作物の共同注視（視覚的位相）、他児への「見せる」行為の発生（身体的位相）の後に、モチーフ発話が発生（言語的位相）されるというプロセスを明らかにしている。第4章では、視覚的位相において、幼児の注視方向と取り入れた製作要素の関連性の時系列解析から、製作物への注視からの短時間の注意逸脱が、独自のモチーフを生み出す際に生じることを複数の事例をもとに示している。第5章では、身体的位相において、他者に「見せる」行為には、製作結果の伝達と製作過程の交渉という2機能を同定できること、4歳児においては見せる際に製作意図の言語表現が行われることを示している。さらに第6章では、「見せる」行為は1年間の中で時期や相手により機能が異なること、製作過程に仲間との親密性や製作経験が影響すること、製作行為から製作物を使い遊ぶ行為へと展開が見られることを示している。第7章では、言語的位相において、2名の抽出児の1年間の変容の事例分析から、製作過程の変化は、加齢による発達だけではなく、個人の表現スタイルの影響が大きいことを明らかにしている。

そして第Ⅲ部第8章の総合考察では、上記5つの研究を総括し、幼児の造形表現の基本構造モデルを示し、本研究が表現活動に与える示唆や意義および今後の残された課題と展望を総括している。

本論文は、幼児の造形表現プロセスを独自の理論枠組みで分析検討したことで、保育研究における表現分野に与える意義は大きく、また当該分野にとどまらず、人やモノを介した相互作用における視覚、身体、言語位相の新たな分析方法を開発した点でも独自性が高いと評価された。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに十分にふさわしい水準にあると判断された。